

超越論性の変容

— 西田とハイデガーにおける媒介と像 —

村井則夫 (明星大学)

哲学的思考はいかにして可能か — 極論すれば、哲学にとっての根本問題はこの問いに尽きると考えられる。「自己」を哲学的に思考する、自己が属している世界や時間を哲学的に思考する、絶対者たる神を哲学的に思考する…… これらのことがなぜ可能なのか。哲学的な言明をする思考の主体はそれ自身どこに立って、どこから事象を見ているのか。哲学的反省というとき、反省するものと反省されるものはどのような関係にあるのか、そしてその関係を反省している思考そのものはどこで成立するのか。こうした哲学的反省の屈折した問題に真剣に取り組むことで、現象学は20世紀の哲学において大きな転換をもたらした。それというのも現象学は、伝統的な実在論と観念論の分割に先立ち、「現れ」という事柄に徹することによって、現れの自存性と現れが生起する次元との関係をその不可分な相関において捉えるばかりか、現れの場そのものの解明を通じて、哲学的思考に先鋭な反省意識を導入したからである。つまり「事象そのもの」の現象学的究明は、同時に「思考そのもの」に対する超越論的反省であり、そうした事象の事象性と思考の超越論性の相互関係こそが、現象学の根本的動向を導いている。

フッサール現象学を批判的に継承したハイデガーは、事象と意識との関係を、現存在の存在了解の超越論的地平というかたちで捉え直すことで、超越論的思考の存在論的な転換を図った。ここでの超越論性思考は、もはやカント的な「経験のアプリオリな条件」という意味を超え、「世界 - 内 - 存在」の「超越」に由来し、現れの媒介たる現存在の「現」(Da)を表現するものとなる。その点でハイデガーの思考は、後期の存在の思惟においてもなお、根本的な意味で超越論的な性格を保ち続け、その哲学的動機は超越論性の変容、あるいは超越論的媒介の深化といった主題のもとで理解することが可能である。

同時代のヨーロッパ哲学を存分に吸収した西田もまた、「純粹経験」を「実在」の根本的なあり方と捉えるところから始まり、その純粹経験をさらに掘り下げながら、経験の生起の「場所」を探り、「自覚」における知の成立にまで遡っていったように、その哲学の歩みには、現象学的な問題意識と超越論的な反省の徹底を見ることができる。西田の思考もまた、フィヒテ的な超越論的反省が主導的な意味をもった時期のみならず、「場所」論の確立以降も、世界における個物の相互限定、あるいは弁証法的一般者の自己限定といった「媒介」の主題系を十分に取り入れ、ハイデガーとも対話可能な超越論性思考の領域を開いていく。その点で西田の思索の歩みにおいても、「自覚」の深まりという仕方、超越論性の自己変容ないし自己深化の過程を見ることができる。

そこで本論では、ハイデガーと西田の思想において、超越論性の変容という共通した思考の方向を見出し、両者の基本的な親和性を押えつつ、とりわけ「媒介」と「像」という主題をめぐる両者の相違を見極めることにしたい。